今、振り返る教師としての原点

私を育てた あの時代、あの出会い

生徒の反発と先輩の言葉に成長を信じる指導を学んだ

兵庫県立家島高校教頭 **西 茂樹**

「生徒のために」という思いは、教師の指導の最大のよりどころだ。だが、その思いはいつも期待通りに結実するとは限らない。だからこそ、支え合える仲間が教師にも必要ではないか……語り合い、共に学び合った2人が振り返る。

最後のHRでの生徒の反発

教職10年目の32歳になる年に龍野高校に赴任しました。生徒の進学意識が高い同校で、進路指導力を高めたいと思いました。

着任後、1年生担任から2、3年生と持ち上がり、4年目も3年生担任になりました。この時の学年副主任が橋本俊雄先生です。橋本先生は志望校検討会などで「生徒の志望を実現するために、教師はやるべきことをもっと精査しよう」と檄を飛ばしていました。常に「生徒にとって最善の指導」を目指す先生を間近に見ることで、私も橋本先生のように自分に厳しくありたいと思うようになりました。

龍野高校で初めて卒業生を送り出した年は、自分なりに一生懸命やったと納得しながらも、「もっと緻密に指導していれば、より多くの生徒が志望校に合格できたのでは」という思いも抱いていました。だから、再び3年生の担任になれたのは、自分にとってもチャンスでした。

1年が経ち、私のクラスは38人中35人が国公立大に合格しました。数字的には成功と言えるでしょう。しかし、進路指導という意味では失敗でした。というのも、卒業式の日の最後のHRで、私は数人の生徒から感謝の言葉と一輪の花を贈られる代わりに、「先生に進路を決められてしまった」と非難の言葉を浴びせられたからです。3年次からの担任であったため、信頼関係を築く時間が足りなかったのかもしれませんし、「生徒のために」と気負いすぎていたのかもしれませんが、晴れの日の彼らのその言葉は衝撃でした。

その日の夕方、私は一部始終を橋本先生に話しました。学年をリードする先生に自分の未熟さを謝りたかったし、尊敬する先輩に助言してもらいたいという思いもあったでしょう。たとえ自分の恥であっても、橋本先生には隠しごとをしたくないという気持ちもありました。ただ、実際にどんな話をしたのかは、あまり覚えていません。それくらい私はショックを受けていたのです。

教師として成長を信じる

4月、私は1年生担任として学年会議に出席しました。学年主任となった橋本先生が作成した資料には、3年間の成長を見通した指導方針が書かれていました。その要旨は「1年は手を掛け、2年で手を放し始め、3年では生徒に自ら考え、行動させる」というものでした。

希望をくみ取り、より良い進路を勧めていたはずの私の指導を、生徒は「教師に決められた」と受け止めました。結果的に、私は橋本先生と逆の指導をしていたのだと気付かされました。

橋本流の進路指導を実践するため、生活習慣などを厳しく指導する一方、お膳立てしながら

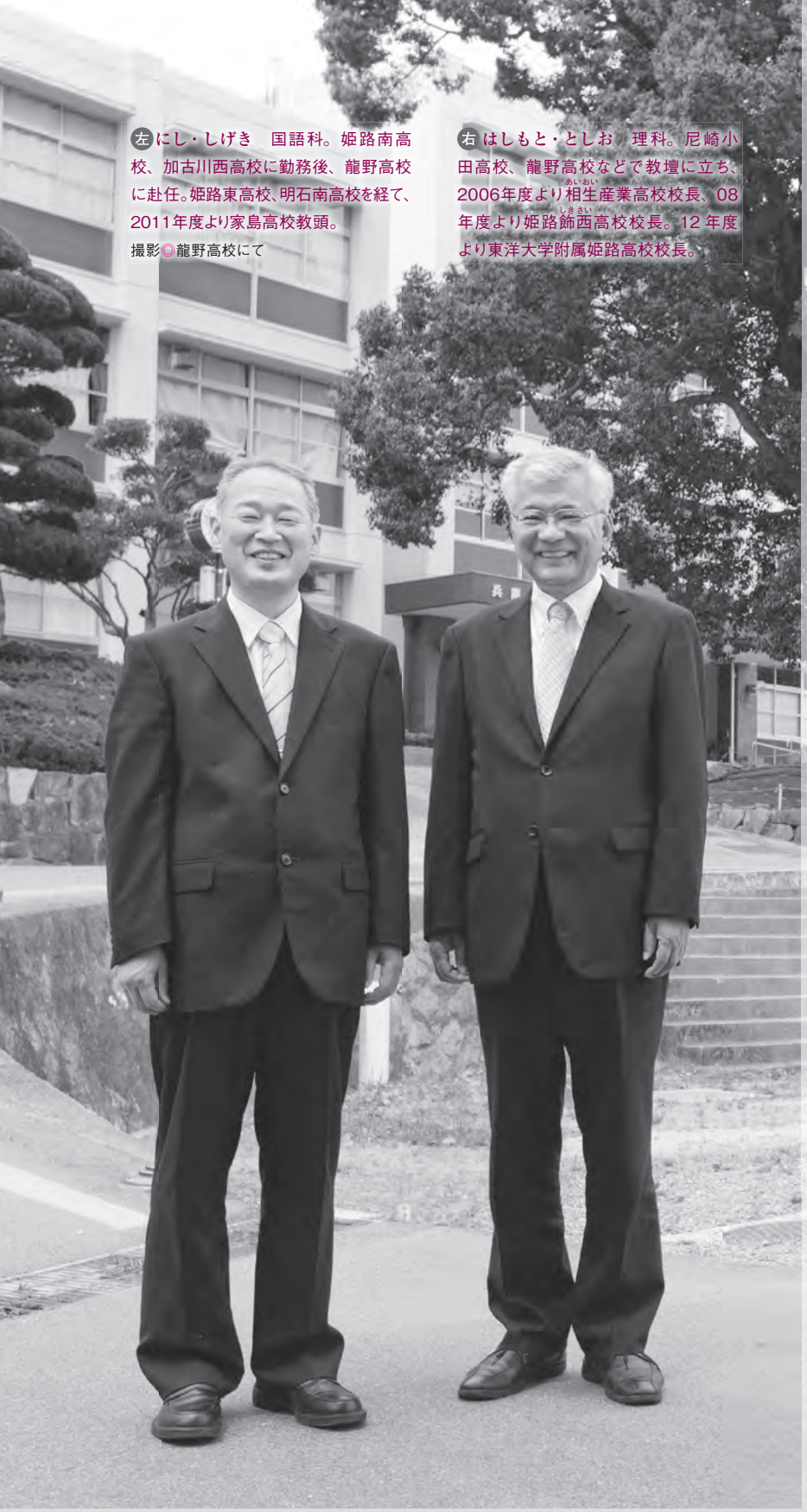
先輩教師の言葉

後輩の経験から私も多くを学び成長させてもらった

東洋大学附属姫路高校校長
橋本俊雄

卒業式の日のHRでの出来事を西先生から聞いた私は、失敗を率直に語るとはなんとすごい人だと驚きました。この人には、「生徒のために自分を向上させよう」という強い意志がある。だから失敗も正直に語れるのだと思いました。そして、そんな西先生が自分を信頼してくれることに、心から感動しました。

私は、その時どんな言葉を返したかは覚えていないのですが、「もしも自分が学年主任になったら、その学年に必ず西先生を迎えて、一緒にたくさんの感動を味わおう」と決心したことだけは覚えています。それが西先生に対する礼儀であり、もしそれが出来なければ自分は先輩ではない



左 にし・しげき　国語科。姫路南高校、加古川西高校に勤務後、龍野高校に赴任。姫路東高校、明石南高校を経て、2011年度より家島高校教頭。

右 はしもと・としお　理科。尼崎小田高校、龍野高校などで教壇に立ち、2006年度より相生（あいおい）産業高校校長、08年度より姫路飾西（しきさい）高校校長。12年度より東洋大学附属姫路高校校長。

撮影◎龍野高校にて

も生徒自身に進路を選ぶ力が身に付くようなかかわりを意識しました。そして、私1人では判断が難しい場面では、橋本先生の知見をお借りしました。特に、家庭と連絡を密にして生徒を見守る必要がある場合は、すぐに橋本先生に相談しました。先生は私の考えを聞くと、「よし、それでいこう」と力強く背中を押してくださったものです。

管理職となった今、自分の姿が後輩を育てていることを強く自覚しています。だからこそ橋本先生のように、常に「生徒のためになっているか」と自問しながら、これからも1人の教師として向上したいのです。そして、「あの先生はアカン」という言葉だけは絶対に口にしないと誓っています。それは結局、「私には人を育てることができない」と語っているに過ぎないからです。教育のプロとして、生徒にも同僚教師にも、それぞれの成長を信じて言葉を掛け続けていきたいと思っています。

実は卒業式の出来事には、後日談があります。1年後の春休み、くだんの生徒数人が「1年前に渡せなかった花です」と職員室にやってきたのです。彼らはあの日の行動を謝り、「今は先生の気持ちが分かる気がする」「先生が薦めてくれた大学に行って良かった」と言ってくれました。私は突然の訪問に驚きましたが、彼らも今日までずっと引きずっていたのかと思うと感慨無量でした。そして、「教育の難しさは、すぐに成果が見えるとは限らないところだ」という橋本先生の言葉をかみしめていました。

と思ったのです。

私は、西先生は生徒にとってベストの進路を示していたのだと信じています。ただ、それを生徒が納得するまで語り合う時間、生徒自身が選択しているように感じさせる時間が足りなかったのでしょう。だから、1年という時間を経て、生徒は再び西先生の元を訪れたのです。このことを聞いて、教育の成果はすぐに表れるとは限らないのだと、私は改めて実感しました。そして同時に、卒業時に満足げな表情の生徒が、長い目で見た時に本当に後悔のない進路を選んだのか、私たちは自分に厳しく問い直さなければいけないと思いました。

私は、成長を止めた教師は、生徒を成長させることなど出来ないと思っています。そして、教師が成長するためには、仲間と語り合い、様々な情報、刺激を得ることが欠かせません。校内での対話が少なくなったとしたら、その原因を周囲に探す前に、自分に周囲を受け入れる雰囲気があるのか、振り返るべきです。

経験した失敗、直面している壁を隠さず話してくれた西先生は、私にとってお互いを成長させ合った仲間です。